

看護実習生の病院実習期間を通じた 患者に対する認識の変化

The Change of Student Nurses' Recognition of What is "Patients" During Apprenticeship in Hospital

亀井 美弥子*

問題

近年、職業教育の場では中学生の職場体験学習や高校生・大学生の就職を見据えたインターンシップなど、職場における体験が重視されるようになってきている。講義や机上の学習と比して、実際に自分の興味や将来の方向性に沿った職業の行われている現場でその業務を体験することは、自身のめざす職場の知識や技術を得る機会となりうる。しかし、それ以上に重要な職場体験の意義として、自身のそれまで培った職業についての周辺知識や社会的関係を新たに確認し、それにより自身のめざす職業に対する認識を再構成することだと考えられる。

医療、教育・保育などのヒューマンケアの分野は、対人的な関わりや個人の習得技術が重視されることから、古くからそのキャリア形成において実習が重視されてきた。確かに、直接に人間が職場で扱う対象となり、またその際に、専門的な技術が必要であるとされているこれらの職場においては、実習がその後のスムーズな職業参加を促すと考えられる。同時に、前述した様に、現場を体験することで、実習はそれまで自身が持っていた職業現場におけるさまざまな事項に対する認識を新たに培う場になるだろう。そして、ここで培われた認識は実際に職業に参加する時、自分の仕事とどのように向き合うか、つまり大きな意味での職業意識に関連することが予想される。

そこで本研究では病院実習に参加している看護学生を対象に、直接にケアの対象となる患者に対しての認識の変化を取り上げた。ヒューマンケアの職場では人に対する身体的なケアとともに、対象となる人の気持ちをおもいやり、その人が病の回復などの目標への意欲を高める様なコミュニケーションの仕方を学ぶ必要がある。しかし、一般に講義や机上の学習でそれらを学ぶには制限があるとされている。確かに、対象となる人との適切な身体的・心的なコミュニケーションへの気づきを得る、つまりそれらを学習するためには、現場で対象となる人とのかかわりを体験することが不可欠であろう。その体験を積み重ねることで適切なコミュニケーションの方法を身につけていくことが、ヒューマンケアの職場においては、熟練への過程の大きな一側面であると考えられる。その際、対象となる人

* 浜松学院大学（発達心理学）

間一般をどのような存在として認識しているかは、そのコミュニケーションを左右する重要な前提だと考えられる。看護師をめざす学生にとって、実習体験とは、紙の上での事例的検討とは異なり、変化する状況に対してその場その場での対処が必要となる生身の患者を相手にする数少ない機会であり、実際のコミュニケーションを学ぶ貴重な時間である。特に、それまで患者と接する経験の少ない看護学生は、実習体験によって、それまで持っていた患者一般に対する認識を劇的に変化させる可能性がある。しかし、従来の研究においてこれら初期の学習の過程が詳細に検討されているとは言い難い。そこで、本研究では、実習体験における看護学生の患者への認識の変化を追うことによって、患者一般に対する認識がどのようなものであり、どのように変化するのかを明らかにしたい。また、古くから看護の職場では「リアリティショック」つまり、自分が思い描いていた看護現場と実際の就職後の現場の現実とのかい離にとまどい、適応に困難を示す新人が少なくないことが知られている。その際に特に患者やその家族に対する対応についての困難が生じていることが指摘されている（福田ら、2004）。この点からも、患者に対する認識がどのようなものであるのか、またその変化がどのように起きているのかを知ることは、看護師の職業参加における困難性を考える上でも重要な視点であると考えられる。本研究では、看護実習生の患者に対する認識の変化を明らかにするにあたって、文章完成法（SCT）を用いた。SCTは与えられたことばに続く文章を考え完成させるという質問紙法である。このことばに続く文章を完成させるという行為は自己の思考や欲求、感情の本性を示唆するとされる（生熊・稲松、2001）。本研究では、実習に参加している学生に対し、患者が主語になる文章を一定期間の間をあけて作成させることによって、時間の経過とともにどのように患者に対する認識が変化するのかを検討した。

方法

対象) 東京都内看護専門学校の3年生 (各論実習参加者)

調査方法) 学年全体で行う授業の時間内において、実習に関する自由記述およびいくつかの看護に関することばを主語 (SCT検査においては語幹と呼ばれる) としたSCTを含む質問用紙を配布した。その中に「患者とは・が・は」を完成させる項目を最大5個記入できるように挿入した。

調査期間) 1回目: 2002年12月, 2回目: 2003年1月, 2003年3回目: 7月, 4回目: 2004年2月

質問紙回収数) 第1回 93 (男子8) / 第2回 63 (男子3) / 第3回 51 (男子2) / 第4回 76 (男子3)

結果と考察

結果の整理と分析方法)

1 回目調査：292 2 回目調査：152 3 回目調査：199 4 回目調査：162の文章を得た。
1 回目で得られた文章をもとに分類を行いKJ法（川喜田，1967）を参考に整理した（Table.1）。その上で，カテゴリの出現頻度を集計し，その各質問紙回における割合を算出した（Table.2）。頻度の割合の比較的大きかったカテゴリについて4回の質問紙での割合の推移を比較した（Figure.1）。

Table.1 「患者」を語幹とするSCT完成文の分類

カテゴリ	内容
定義	「病んでいる人」「～である者をいう」「病気だ」など「患者」についての説明の記述
個別多様性	「は様々だ」「は一人一人違う」など患者の多様性や個性についての記述
性格特性	「はやさい」「が意地悪」など性格特性についての記述
状態	「は制限がある」「が回復しつつある」などの状態についての記述
行為	「が笑う」「が寝る」など行為についての記述
内的状態	「はつらい」「は不安に思っている」など心理的状态についての記述
社会的状況	「が増えている」など社会的状況についての記述
社会的地位	「は弱者である」など患者の社会的地位についての記述
社会的特性	「とは高齢者が多い」など社会的特性についての記述
権利	「は自らに選択権がある」など患者の権利についての記述
患者の一般性	「とは誰でもなる可能性がある」など患者とそれ以外に隔たりがないことについての記述
人間	「とは人間だ」など患者の人間性についての記述
位置づけ	「が中心」「はお客様」など患者をどうとらえるか、患者の位置づけについての記述
対応の仕方	「は不安を取り除くようにするべきだなど」対応や関わり方についての記述
関係性	「とはうまくやりたい」「は学ばせてくれる」など患者と自分自身の関係を軸にした記述
自身の気持ち	「が笑うと嬉しい」「が早く退院するといい」など、自分自身の気持ちや希望についての記述
その他	上記のカテゴリに入らないもの

Table.2 各回におけるカテゴリの割合

	定義	個別多様性	性格特性	状態	行為	内的状態	社会的状況	社会的地位	社会的特性	権利	患者の一般性	人間	位置づけ	対応の仕方	関係性	自身の気持ち	その他	合計
1(2年12月)	15.8	4.1	4.1	5.5	7.5	13.0	2.1	2.7	2.7	1.4	1.0	2.4	6.2	6.5	15.4	7.9	1.7	100.0
2(2年1月)	9.2	1.3	4.6	13.8	13.2	22.4	1.3	2.0	0.7	0.0	0.0	0.0	9.2	0.0	13.2	6.6	2.6	100.0
3(3年7月)	10.6	4.0	11.6	10.1	18.6	18.6	1.0	0.5	2.0	0.0	0.0	4.5	4.5	0.5	4.0	3.5	6.0	100.0
4(3年2月)	14.2	3.7	11.7	4.3	19.8	13.0	1.9	0.6	1.9	1.9	1.2	1.9	6.2	2.5	7.4	3.1	4.9	100.0

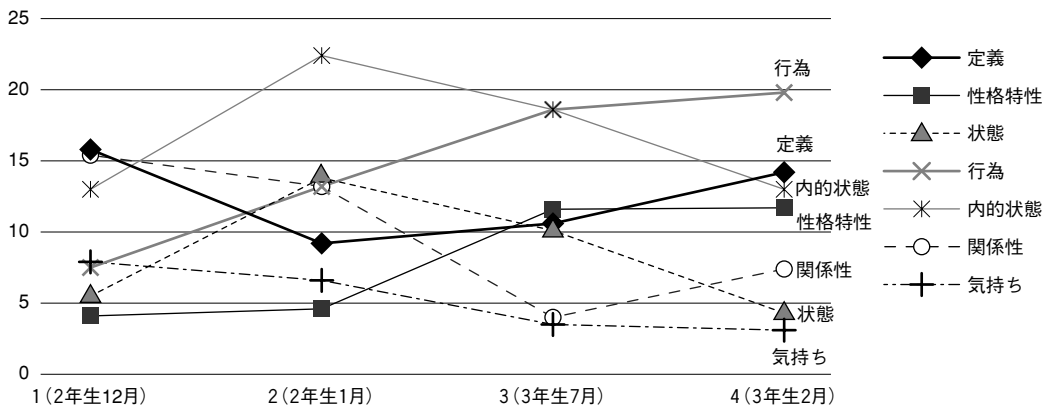


Figure.1 主要カテゴリの割合の推移

考察)

収集された完成文は多様であった。「患者とは・が・は」という語幹に対する比較的一般的な回答と思われる定義（「患者とは病んでいる人」）や説明（「患者は一人一人違う」）のみならず、「患者が回復しつつある」「患者が寝る」「患者はつらい」などの状態や行為の記述があった。また、「患者が笑うとうれしい」「患者とはうまくやりたい」など、患者の気持ちや自分自身の患者との関係性、自分自身の希望などの記述が見受けられた。これは、文章完成法が、学生にとっての「患者」という存在の客観的認識を得るだけでなく、自身の患者に対する認識や関わりが反映されるものであることを示している（Table.1）。

全調査4回における各カテゴリの割合（Table.2）をみると、4回の調査全体を通じて、患者の定義や説明、患者の状態（病態など）や内的状態（「精神的につらい」など）や性格特性（「優しい」）、行為（「起きる」など）、自身との関係性の記述が多かった。

これら多かった記述について時間的推移とともに見ていく（Figure.1）。「定義」は10から15%付近であり変化がなかった。また、患者の「内的状態」「状態」は実習開始後に記述が多くなり、実習終了へ向けて減少した。「自身との関係性」の記述は初回に比較して減少傾向にあった。「行為」「性格特性」は増加していた。

記述内容を検討すると「行為」や「性格特性」の増加は学生が病院実習で患者と直接接することによってより患者を具体的にとらえられるようになってきたことが反映されているのではないと思われる。「さびしい」「つらい」などの一般的に推測可能な「内的状態」の記述に比べて「患者が歩いている」「患者が便をした」などの患者の「行為」への記述は具体的関わりを持った者でなければ表現しにくいものであろう。また、「性格特性」に関しても、3回目、4回目の質問紙において「患者はわがまま」「患者は自分勝手」というネガティブな性格特性が多く出現していた。これも実際の援助を通じて患者という生きた人間とのやりとりの難しさを感じることに起因しているのではないかと推察される。

これと併せて「自身との関係性」の頻度が減少していることも注目に値する。「自身との関係性」として、各論実習が始まる前である第1回目の質問紙調査で多く見られた記述は、「患者が私たちに様々なことを教えてくれる」「患者とは私を育ててくれる」といった“何かを学ばせていただく私と学びを与える患者さん”との関係、または「患者とは仲良くしたい」「患者とは上手くやっていけるか自信がない」といった関係の安定性への不安や希望であった。それが、時を経て頻度の減少が見られるとともに「患者が怒ったときは一度身を引く」といった具体的なやりとりに関する内容や「患者とは回復する過程を一緒に過ごす」などの患者との一体感の記述も見られた。さらに、「その他」に分類した文章の中には「患者がNsを支えることもある」「患者は患者さんどうして励まし励まされ元気になっている」「患者とは家族にとっては大切な存在である」など、自分と患者以外の関係についての記述が出現していた。ここには、学生が自分と患者という関係以外の患者を取り巻く関係性について広く目を向けていることがうかがえる。

これらのことから、この「自身との関係性」の減少は、「行為」の記述の増加、「性格特性」のネガティブ化と併せて解釈すると、学生が“一步引いた視点から”より客観的かつ広い視野で患者を見ることができるようになってきたことの反映だといえるかもしれない。

さらに「内的状態」や「状態」の記述内容の変化を見てみると、「内的状態」では後半になって「患者は不安と希望の双面を持っている」「患者とは価値観の変化がある人」などの患者の二面性や変化についての記述が出現していた。また、「状態」についても2回目の調査以降、「患者は日々変化している」など、やはり変化についての記述があった。これらからも患者とは「つらい」「さみしい」といった一般的な推測から、変化や人間の二面性に気づくようになってきていると推測できる。これら変化についての記述は看護において患者というものを認識するとき、特に重要な気づきだと考えられる。事例研究など紙の上での学習では、患者の変化が物語としてある意味一瞥して俯瞰可能なものとしてとらえられる。しかし、実際には患者の身体的・心的状態は刻々と変化し、看護師はその都度の対応を求められるはずである。ここで見られた変化の記述は、変化する“生身の”患者を実感した経緯から出てきたものだと思うのだが、このように変化するものとしての患者という認識があってはじめて、実際の患者の変化を先回りして予測できるのではないだろうか。また、患者の二面性についても、患者という存在を一面的に見るのではなく、多面性のある存在としてとらえることで、より患者の内面を精緻にくみ取り、適切な対応をとることを可能とするのではないか。

以上の分析から、実習が進むにつれて、看護学生の「患者」に対する認識は、一般的なものから、より具体的で客観的、刻々と変化し、多様な面を持つ存在へと変化する事がわかった。また、患者をとりまく関係性への注目など、より広い視点を持つようになる可能性が指摘できた。つまり、病院実習を通じて、学生は医療の対象についてのより精緻化された、分析的な視点を得るとともに、より広い範囲の視野を得ることがわかる。この広い視野と精緻化された視点とは一見相矛盾するよう見えるが、学習の本質はこれが同時に起こる過程だと指摘されている。

近年、学習の分野では協同（共同）的学習や状況的学習ということばが用いられ、学習の概念の再検討が行われている。これらの学習観は、フィールドでの調査をもとに、人間の学習過程が、学習者に関わる人々やその場におけるさまざまな社会的資源によって導かれることを示し、従来の個体主義的な教授学習のスタイルを批判的に乗り越えるために提唱されており、看護師の学習の過程においても、しばしば援用されるようになってきた。この立場の代表的な理論的視座である正統的周辺参加（Lave&Wenger,1991）の見方では、学習を実践のコミュニティに参加し、参加を通じて熟練となっていく過程ととらえている。その過程では、新しく実践コミュニティに参加した学習者は、仕事を実際に行うなかで、具体的な技術や知識に習熟するとともに、コミュニティ全体に対する広い視野をもつこと

が指摘されている。今回の分析で得られた患者への認識の精緻化と広い視野との同時取得はこの見方から見ても妥当な結果だといえよう。

以上、病院実習に参加した看護学生に対して「患者」を語幹としたSCTを縦断的に行った結果、全体の傾向としては、患者の認識がより客観的に精緻化されるとともに、患者に関する広い視野を得ていくという変化をたどることがわかった。またこれは近年の協同的・状況的な学習の見方からも妥当な変化であることが指摘できた。しかし、本研究の目的は、全体の傾向を把握するものであったため、個別の学生についての変化については見えていない。今後において、リアリティショックへの対処など、個々人の職業参加過程のサポートを推進するためには、どのような体験がどのような認識の変化に関連するのかなどを明らかにする必要があるだろう。そのためには、全体の傾向を把握するだけでなく、個別の学生の変化を追うことが必要だといえる。また、今回は看護実習生を対象にしたが、学生の実習での体験と、実際に就職した後に現場で体験することとは当然のことながら多くの違いがあると思われる。看護学生の初期の認識の変化を基礎として、実際の職場ではどのような変化が起きるのかを検討することも、今後の課題となるだろう。

文献

福田敦子・花岡澄代・喜多淳子・津田紀子・村田恵子・矢田眞美子・中村美優・鶴田早苗・松浦正子・伊藤佳代子・古城門靖子. 2004. 病院に就職した新卒看護職者のリアリティショックの検討—潜在構造の分析を通して—. 神戸大学医学部保健学科紀要 20. 35-45.

生熊讓二・稲松信雄. 2001. 「文章完成法 (Sentence Completion Test: SCT)」『心理アセスメントハンドブック第2版』上里一郎 (監修) . 西村書店. pp.232-246.

川喜田二郎. 1967. 発想法—創造性開発のために. 中央公論社

Lave, J.& Wenger, E. 1993 状況に埋め込まれた学習:正統的周辺参加. 佐伯 胖, (訳). 産業図書.
(Lave, J.& Wenger, E. 1991 *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press.)